

[講演要旨] 1498年明応東海地震と対をなす南海地震について

石橋克彦(神戸大学名誉教授)

§ 1. はじめに

表記の南海地震(「明応南海地震」と仮称)があったことは、近畿・四国地方の15世紀末頃の液状化跡などから可能性が高いと考えられている。しかし確かな文献史料がなく、実在と発生年月日は未だ不明である。石橋(2014, 『南海トラフ巨大地震—歴史・科学・社会』岩波書店, 文献はこれを参照)は、明応南海地震の候補が下の§ 2~5の4つあると指摘したが、論述にやや不備があったので再論する。本発表は問題の整理であって、結論を出すわけではない。

§ 2. 明応七年六月一日(1498.6.30)の地震

この地震は京都で強く感じられ、熊野・伊勢・三河も強く揺れた。上海付近で本地震によるとみられる水面動揺が生じた。都司・上田(1997)と都司(1999)は、『熊野年代記』の記事を湯峰温泉が六月一日午後2時に湧出停止したと解釈して、本地震こそが明応南海地震だと主張した。上海付近の水面動揺は南海地震の特徴だとし、また九州で大被害と津波があり、三河湾奥や伊勢湾を大津波が襲ったとも解釈した。これらの考えは石橋(1998, 2002)が批判したが、いちおう明応南海地震の候補の1つとしておく。ただし、本発表では詳しくは立ち入らない。

§ 3. 明応七年八月二五日(1498.9.11)の東海地震との同時発生

都司(1980, 81)は、『紀伊続風土記』(江戸末期に和歌山藩が編纂した地誌)と『和歌山県神社明細帳』(明治初期に内務省が各府県に作成させた神社台帳)に見える「明応年間の高波」といった複数の記事を詳しく検討し、明応東海地震の震源域が少なくとも紀伊水道沖まで達していて和歌山付近に津波をもたらしたと主張した。記事は、当時の紀ノ川河口の和田浦という港町の住民・寺社が津波のために湊村(現在、和歌山城西方の紀ノ川東岸)に移ったと伝えるものだが、矢田(2009)もこれを歴史的に吟味して、明応七年八月二五日の地震津波以外には考えられないと述べている。和歌山市付近に大津波があったならば明応南海地震が同時発生したことになる。

しかし、一連の記事中には「明応以前大浪の時一村流失せり其残れる居民明応の頃皆湊村に移る」(下線は石橋)という記述もあり、以下のような疑問が残る: 1. 移転先の湊村も津波の危険性は和田浦と大同小異ではなかったか、2. 悉皆調査ともいえる『紀伊続風土記』に和田浦の津波しか記されていないのは不自然ではないか、3. 『神社明細帳』の記事が『紀伊

続風土記』と独立で信頼性があるといえるか、である。浪害の危険性は慢性的にあったとしても、「明応の頃」の集団移転はこの地域のこの時期の社会的要因が強かったという可能性はないのだろうか。ただし、津波堆積物の調査は必要であろう。

なお、明応年間の津波が事実だったとしても、それが明応南海地震の東海地震との同時発生を意味するわけではないことに注意を要する。

§ 4. 明応七年閏一〇月一八日(1498.12.1)の地震

この地震は午前2~3時頃に発生し、京都で殊更強く感じられた。『実隆公記』は「地震甚し、その動き数刻、消魂しおわんぬ」と記し、奈良の『大乘院寺社雑事記』は閏一〇月一九日の条に「数日地振連続」と書いている。ふつうは熊野灘以東の大余震か内陸の地震と考えるだろうが、これが明応南海地震だったという可能性を否定はできない。

§ 5. 永正九年六月九日(1512.7.21)の地震

徳島県海陽町宍喰の『永正九年八月四日 慶長九年十二月十六日 宝永四年十月四日 嘉永七寅年十一月五日 四ヶ度之震潮記』という記録中の「宍喰浦成来旧記之写」に、同地が永正九(1512)年八月に洪浪に襲われてほぼ全滅し、約2200人の死者を生じたことが記されている。しかし、これに符合する地震・津波・気象などの記録はいまのところ知られていない。『日本被害地震総覧 599-2012』(宇佐美・他, 2013)は「地震記事なく、風津波か?」としているが、猪井・他(1982)は高潮説に疑問を抱くとともに、作り話とも考えられないと述べている。

いっぽう、表記の地震が夜10時頃に京都で強く感じられた。震動は非常に長く続くとともに、翌朝までに余震と思われる揺れが8回くらいあった(実隆公記, 尚通公記)。一八日には地震および宮中の怪異を伊勢神宮に祈禱させた(大日本史料)。これが京都から遠くない内陸の浅い大地震だったら有感余震がもっと多いはずだから、長時間の揺れとあいまって、遠方の(巨)大地震を思わせる。これが南海地震で、宍喰浦の旧記が八月と書いているのは六月の誤伝・誤記だったということはないだろうか(『震潮記』の表題に「八月四日」とあるが「四日」の根拠は不明)。

可能性は低いかもしれないが、本地震の素性の追究とともに、そもそも旧記の内容が本当か否か、宍喰での災害遺跡や津波堆積物の調査が望まれる。東海地震の14年後というのは間が空きすぎるとも思われるが、そういう先入観は捨てたほうがよいだろう。